

「模擬保育」実践に関する一考察

— 演劇教育の観点による保育実践力、及び コミュニケーション力の育成の試みとして —

日高 由貴・樋口 幸
多田 鈴子・生田 暢彦

〔論文〕

「模擬保育」実践に関する一考察

—演劇教育の観点による保育実践力、及び コミュニケーション力の育成の試みとして—

日高 由貴・樋口 幸
多田 鈴子・生田 暢彦

1. はじめに一問題の所在
2. 本研究の目的と方法
3. 模擬保育を実施した授業の位置づけについて
4. 本研究で実施した模擬保育の実践内容
5. 学生のアンケート結果の分析
6. まとめと今後の課題

1. はじめに一問題の所在

本稿では、保育実習指導の授業において実施した「模擬保育」の実践について、昨今とくに注目されている「演劇教育」とのかかわりから、保育士となるための実践力だけでなく、社会人としての対人関係のスキルを磨くことも可能なのではないか、という視点に基づいて考察する。

「模擬保育」という言葉は、保育士養成校以外の場所では、あまり耳にすることがない言葉かもしれない。

詳しい内容や実践については後述するが、ごく簡単に説明すれば、学生が保育者役と子ども役になり、実際の保育を演じてみる活動のことである。保育の現場を想定して自分が考えた指導案にもとづいた実演を行い、指導案の作成、事前の準備、言葉の選び方、時間配分の仕方について、学生同士で意見を言い合い、保育者としての実践力を身に付けるために学びを深めるものとしてある。

片山らは、「模擬保育は子どもが大人なので、子どもたちを前にする場合とは異なる緊張感や恥づかしさを感じるかもしれないが、自分が人前に立った時にどれくらい緊張するのかを知り、緊張した時の自分をどのようにセルフコントロールすればよいのかを体得するチャンスである¹⁾」と述べている。学生たちからも、「子どもの前で設定保育をするより緊張する」という声がよく聞かれるが、より緊張する場面において練習することで、自分自身についての理解を深めることができると同時に、子ども役になることによって、子どもの視点から、クラスメイトの保育を客

観的に見つめ、アドバイスをすることによって、自分自身の保育にも活かしていけるという効果が期待される。

すなわち、このような模擬保育の実践は、指導案作成の練習になるだけでなく、ロールプレイングの要素が加わることで、子どもの視点だけでなく、実習生を指導する先輩保育者の視点を想像する力が育まれることも期待できるといえよう。

冒頭でも述べたように、本稿で試みたいのは、「模擬保育」という、保育現場での実践力を高めることを目的とした授業実践について、保育士として必要な力を育成するだけでなく、演劇教育の観点からも、人材育成に有効なのではないか、という視点に基づく考察である。

のちほど述べるが、2017年の教職コアカリキュラム（文部科学省）においても打ち出されている、「主体的・対話的で深い学び」のために、演劇教育は有効であると考えられている。「模擬保育」は、通常は保育養成校で授業の一環として行われることがほとんどであるが、いわば、そこで行われている内容には、海外では「drama（ドラマ）」として行われる演劇教育の要素を含んでいると考えられる²⁾。

演劇教育の目的や利点は、様々な立場を演じることによって、異なる考え方、感じ方について視野を広げ、理解を深めることができるということにある。一言で言えば、「対話」する力を養うことができるといえよう。また、「フィクションである」ということがある種のセーフティーネットになり、日ごろうまく表現できない感情や言葉も、役の台詞としてならば安心して表現することができる、という長所もある。

日本においては、文化的にも、日本語という言語の成り立ちからしても、「対話」をすることが難しく、演劇教育もなかなか根付くのが難しいと言われているが、保育士養成校で模擬保育を行うことは、実習を経験してきた学生にとっては現実的に想像しやすいという利点がある。つまり、いきなり「ロミオとジュリエット」を演じるよりも、学生の大半にとっては、実習やインターンシップでの現場経験をもとに、比較的想像しやすい設定でるといえる。また、自分が「子ども」の立場になってみることで、保育者の説明のわかりにくい部分、進め方を工夫したほうがいい点などを、年齢に応じた子どもの発達に照らし合わせて考えることができるということも利点にあげられるであろう。

言葉の発達の途中段階にある子どもたちに、なにかを言葉で伝えることは容易なことではなく、年齢に応じた発達の理解が必要とされるが、子どもの思考や感じ方を想像してみたり、学生同士で意見を言い合うことで、発達についての理解が深まることも期待される。

2. 本研究の目的と方法

模擬保育に関しては、これまでも先行研究の蓄積がある。以下、一部ではあるが簡単に整理しておきたい。

まず、模擬保育の意義に注目して書かれたものとして、阿部アサミ「保育者養成校における実習に関する研究—模擬保育の意義に着目して—」（白鷗大学教育学部論集、10（1）、263-276、2016）がある。

また、領域「人間関係」や「健康」、あるいはそれらにかかわる「運動遊び」の実践として模擬保育を考察したものに、阪口将太「領域「健康」及び領域「人間関係」から見た体育授業における運動遊びを用いた模擬保育の位置づけ」（聖和短期大学紀要、第2号、11-16、2016）、櫻木真知子「保育専門科目に実践を取り入れることによる学びに関する報告—「保育内容・健康」に模擬保育形式の運動遊びを導入することの効果を例として—」（聖徳大学研究紀要、聖徳大学第27号聖徳大学短期大学部第49号、127-134、2016）などがある。

さらに、模擬保育に関しては、2017年に文部科学省によって策定された「教職課程コアカリキュラム」の「保育内容の指導法」の中で提示された「主体的・対話的で深い学びが実現する過程を踏まえて具体的な指導場面を想定して保育を構想する方法を身につける」という全体目標を踏まえた実践に関する報告が、近年とくになされている³⁾。杉村智子・安東綾子「保育内容の指導法における模擬保育実践—能動的な共同による学びの視点から—」（帝塚山大学現代生活学部子育て支援センター紀要、第3号、77-87、2018）、清水健「保育者養成における学生の主体的な学びにつながる模擬保育の実践」（帝京学園短期大学紀要、第21号、46-62、2019）などがそれにあたる。

とりわけ、2018年の杉村・安東らの論考においては、「保育者役」「子ども役」の他、「観察・評定者」という三つの視点から、それぞれの視点から学生が何を学ぶのかについて、詳細に検討している。

また、猪田・久保木・塩津らによる一連の研究は、模擬保育に、他者の模擬保育を客観的に観察する「観察者」という役割を導入することによって、どのような省察の視点が与えられたのかについて考察している⁴⁾。三年間にわたり、アンケートの結果の分析などをふまえ、授業内容の改善を試みた軌跡として、多くの示唆に富む。

3. 模擬保育を実施した授業の位置づけについて

本学科は、厚生労働大臣が指定する「指定保育士養成施設」であり、専門カリキュラムと保育実習の規程を満たすことによって、国家資格である保育士資格を取得することが可能である。また、保育士資格、幼稚園教諭2種の二つの国家資格に加え、昨年度からは、特別支援学校教諭2種の免許状も取得することが可能になった⁵⁾。

保育所と幼稚園は、もともとその成り立ちや役割、管轄が異なり、保育所は厚生労働省、幼稚園は文部科学省の管轄である。

保育士資格と幼稚園教諭の資格は別の資格であるが、平成18(2006)年10月から施行された「就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律」（第164回国会において成立⁶⁾）により、「認定こども園制度」が始まったことにより、保育士資格と幼稚園教諭の資格

の両方を必要とするこども園が増加していることから、本学科では、教育実習指導の授業と連携して指導を行い、両方の資格を2年間でスムーズに取得できるよう、カリキュラムの考案を行っている。

児童福祉法によると、「保育士とは、保育士の登録を受け、保育士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもって、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うことを業とする者をいう（児童福祉法第18条の4）」とある⁷。

この定義にあるように、保育士には、「専門的知識及び技術」、「児童の保育」、「児童の保護者に対する保育に関する指導」を行うことが業務とされている。

保育実習指導とは、保育士資格を取得するための実地試験に相当する実習に関する授業を指している。

当該授業は、1年生の1年間（保育実習指導Ⅰ）、2年生の前期（保育実習指導ⅡⅢ）に行っている、保育士資格を得るための実地試験にあたる実習に関する、知識や実践方法を学ぶための授業である。模擬保育についてのこれまでの先行研究においても、いわば「理論」と「実践」を繋ぐものとして模擬保育をとらえている研究が多いことから、とりわけ保育実習指導の授業においては、保育士として必要な専門的知識の習得はもちろんであるが、いかに実践の場でその知識を活かし、応用できるかという実践力の育成が重視されていると言うことができよう。そしてこのような保育実践力は、幼稚園教諭としても必要とされる力であることは言うまでもない。

本学では、保育士資格と幼稚園教諭2種の両方の取得を目指す学生が参加する実習は下記の5回である。

表1 2年間の実習のスケジュール

(1年次)	
9月上旬	教育実習Ⅰ（幼稚園・こども園）
10月下旬	保育実習Ⅰ（乳児院・障害児／者施設・児童養護施設）
2月中旬	保育実習Ⅰ（保育園・こども園）
(2年次)	
6月上旬	教育実習Ⅱ（幼稚園・こども園）
9月上旬※	保育実習Ⅱ（保育園・こども園）もしくはⅢ（施設）

※9月の実習では、2年次はⅡとⅢに別れ、Ⅱを選択した学生は、保育園もしくはこども園、Ⅲを選択した学生は施設に実習に行く。

4. 本研究で実施した模擬保育の実践内容

続けて、模擬保育についての説明にうつりたい。

冒頭でも簡単にふれたように、模擬保育とは、英語では“Simulated Childcare”とも訳されるように、いわば、現場での保育をシミュレーションすることである。

すなわち、学生が保育者役と子ども役になり、保育の現場を想定して自分が考えた指導案にもとづいた実演を行い、指導案の作成、事前の準備、言葉の選び方、時間配分の仕方について、学生同士で意見を言い合い、保育者としての実践力を身に付けるための活動である。

指導案作成の練習になるだけでなく、ロールプレイングの要素が加わることで、子どもの視点、実習生を指導する保育者の視点を想像する力が育まれることも期待される。

昨年度は、一年生の11月下旬に模擬授業の保育をし、その後グループに分かれ、3クラスにわけて模擬保育を行った。全員がそれぞれ指導案を書き、実際に保育を実演し、残りの学生は、子ども役と、アドバイスシートの記入係をおこなった。

具体的な授業の方法についてはのちに詳しくふれる。

保育実習指導1の概要

表1は2022年度の保育実習指導1（保育所）の後期の授業内容を示す。表中に示した模擬保育①～②が模擬保育を実践する日である。

表1 授業進行表

	保育実習指導Ⅰ
1	施設実習に向けて
2	施設実習オリエンテーション
3	実習直前指導他
4	実習のため後日代替授業
5	実習のため後日代替授業
6	施設実習事後振り返り
7	施設実習事後振り返り
8	保育所実習・模擬保育について
9	模擬保育①
10	模擬保育②
11	保育所実習課題について考える
12	身上書清書
13	保育所実習オリエンテーション直前指導
14	保育所実習オリエンテーション
15	保育所実習直前指導

模擬保育についての説明

表1で示したように、8回目の授業において、学生に模擬保育の説明を行った。

冒頭でも説明したように、模擬保育とは、学生が保育者役だけでなく、子ども役も演じることで、実際の保育現場での実践を想定しつつ、指導案を作成し、実際に保育を行うものである。また、この授業においては、さらに、アドバイス役を2種類に分け、保育実践についてのアドバイスを書く役割と、指導案についてのアドバイスを書く役割をも設け、学生は、合計4種類の役割をローテーションで全種類必ず担当するようにした。

また、学生には、授業の中で模擬保育を効果的に活用できるよう5つのポイント（片山・荒木・西村、2012）を伝えた。

1. 演技力を磨く
2. 子どもたちに話す言葉を工夫する
3. 年齢に応じた言葉がけを工夫する
4. 製作活動をする場合は必ず作ってみる
5. 安全への配慮を今一度確認する

1の「演技力」について、本稿で模擬保育について考察するにあたり、「演劇教育」という、模擬保育と直接的に繋げて論じられることは少ない視点をあえて盛り込んだ理由を述べる。模擬保育においては、指導案の作成力や、子どもの発達についての理解、環境構成に関する想像力が必要なことはもちろんであるが、同級生を子どもに見立てて保育を行ったり、自分が子どもの立場に立って発言したりという、演技力が必要とされ、とりわけ子ども役の学生たちがサポートする力（実際の子どもの近い形で発言したり、行動したりする力）に比例して、学びの深さが変化するためである。

また、2と3に関しては、子どもと言葉の発達についての知識と理解が必要とされる。4に関しては、実際に製作することで、どのような身体的機能の発達が必要とされる作業であるのか、確認することが必要である。具体的には、ハサミを使う行程が含まれていた場合、その年齢でハサミを使える子どもがどのくらいいるのか、使えるとすれば、どの程度の作業なら可能であるか、を考えながら保育内容を考案する必要がある。もちろん、これらの発達段階は年齢だけで区切られるものではなく、個人差があることはもちろん、園によってもさまざまなケースがあることが想定されることから、つねにできなかった場合の代替案も念頭においておく必要がある。また、子どもが誤飲してしまうような大きさのものが含まれていないかも、十分に検討する必要がある。このことは、5の安全への配慮ともかかわっている。

模擬保育実践について

2022 年度の模擬保育は 1 班を学籍番号順 6～7 名の学生によって編成した。また、3 班を一つのグループに編成し、4つの大きなグループ（イ・ロ・ハ・ニ）に分け、それぞれ大きなグループごとに 3 回にわたって模擬保育を実践した。

学生が担う役割としては、「保育者役・子ども役」、「保育実践アドバイス担当役」、「指導案アドバイス担当役」の 3 つを設定し模擬保育を実践した。模擬保育の内容については、夏休みの宿題であった実習の導入に使う保育教材を使い模擬保育をすることとした。従って、必ず、指導案に実習の導入に使う保育教材を組み込むこと、その後の主活動の記入を前提とした。

表 2 は学年を 4 グループに分けたイグループの役割分担の詳細を示している。

模擬保育を実践する時間は、保育実践が一人 6 分間、アドバイザー記入（図 1）時間に 5 分間を設けた。

模擬保育のための指導案は 30 分間の設定で作成するが、授業時間の関係上実際に実演する時間は 6 分間とした。

それぞれの役割についての詳細を次に示す。

表 2 模擬保育実践 イグループ 日程表

模 擬 保 育 ①			模 擬 保 育 ②			模 擬 保 育 ③		
実演者・ 子ども役	保育実践 アドバイス 担当	指導案 アドバイス 担当	実演者・ 子ども役	保育実践 アドバイス 担当	指導案 アドバイス 担当	実演者・ 子ども役	保育実践 アドバイス 担当	指導案 アドバイス 担当
1	7	13	7	13	1	13	1	7
2	8	14	8	14	2	14	2	8
3	9	15	9	15	3	15	3	9
4	10	16	10	16	4	16	4	10
5	11	17	11	17	5	17	5	11
6	12	18	12	18	6	18	6	12

実習指導案には、何歳児対象で、何名の子どもを対象にしているかを記入し、「前日までの子どもの姿」「活動のねらい」「活動内容」「時刻、時間」「環境の構成」「予想される子どもの活動」「保育者の援助」を記入してもらう。

また、実演者の指導案は、同じグループのすべての学生の指導案を縮小コピーし、他の学生の指導案も見ること、さまざまなアイデアを学ぶことができるようにした。また、アドバイスに関しては、保育実践に対するアドバイスを書く役割と、指導案に対するアドバイスを書く役割を分けることにより、実践だけ、あるいは指導案の書き方に集中して参加することが可能になるよう配慮した。実演後は、アドバイス係がシートを記入している時間に、実演者、及び子ども役に、感想や、よかったところ、気がついた点などの意見を言うってもらうようにした。

実演者と子ども役の感想では、実演者は「緊張した」、子ども役は「楽しかった」と答える場面が多く見られた。多くの学生は、実演者として保育を行うよりも、「子ども」役を演じるという、日頃はあまり経験することのない状況に楽しさを見いだしているように見受けられた。とくに、すこし保育者を困らせるような、予想を超えた質問や応答をするときに、周りの子ども役からも笑いが起こり、一種のアイスブレイクのような効果が見られる場面も幾度かあった。

保育実践アドバイスシートについて

保育実践アドバイスシートについては、以下のような項目を念頭において記入してもらうこととした。

[保育実践について 見るポイント]

- ・表情は生き生きしていたか
- ・声の大きさ、話すスピードは適切だったか
- ・話しかける内容がわかりやすかったか
- ・内容が年齢に合っていたか
- ・全体に目を配っていたか
- ・教材の準備や環境設定は適切だったか

○よかった点、学びたいと思った点を記入しましょう。

○保育実践がもっとよくなるためには、具体的にどのように改善したらよいと思いますか。

指導案アドバイスシートについて

また、指導案アドバイスシートについては、以下のような項目を念頭に置いて記入してもらうこととした。

[指導案について 見るポイント]

- ・ねらいに合った活動内容であるか
- ・子どもが興味を持って取り組める活動であるか
- ・年齢に合ったねらい、活動であるか
- ・ねらいを達成するために最適な環境構成を考えることができるか
- ・ねらいを達成するために具体的な子どもの活動が記入されているか
- ・ねらいを達成するために具体的に保育者の援助（はたらきかけ）が記入できているか

○よかった点、学びたいと思った点を記入しましょう。

○指導案がもっとよくなるためには、具体的にどのように改善したらよいと思いますか。

保育実践に関しても、指導案に関しても、学生にとっては、どこに着目して改善点をアドバイスすればいいのかを理解することが難しいと考えられるため、作成する段階でいくつかの着目すべき点を例として挙げた。

指導案作成においては、ただ漫然と保育を行うのではなく、明確なねらいと、ねらいを達成するための環境構成、子どもの活動、保育者の援助をシミュレーションできる力が必要とされる。細部にわたって想像力を広げていくためには、さまざまな角度からアイデアを現実化するための視点が不可欠である。そのために、どこに着目すべきであるのかのポイントを例示することは、とりわけ自分の考えていることを言語化することに苦手意識を覚えている学生にとっては、糸口となりうると考える。

図1 保育実践アドバイスシート（左）、指導案アドバイスシート（右）

保育実践 アドバイスシート

さんへ

学籍番号 名前

見	保育実践について
る	・表情は生き生きしていたか
が	・声の大きさ、話すスピードは適切だったか
い	・話しかける内容がわかりやすかったか
し	・内容が年齢に合っていたか
つ	・全体に目を配っていたか
と	・教材の準備や環境設定は適切だったか
○よかった点、学びたいと思った点を記入しよう。	
○保育実践がもっとよくなるためには、具体的にどのように改善したらよいと思いますか。	

指導案 アドバイスシート

さんへ

学籍番号 名前

見	指導案について
る	・ねらいに合った活動内容であるか
が	・子どもが興味を持って取り組める活動であるか
い	・年齢に合ったねらい、活動であるか
し	・ねらいを達成するために最適な環境構成を考えることができているか
つ	・ねらいを達成するために具体的な子どもの活動が記入されているか
と	・ねらいを達成するために具体的に保育者の援助（はたらきかけ）が記入できているか
○よかった点、学びたいと思った点を記入しよう。	
○指導案がもっとよくなるためには、具体的にどのように改善したらよいと思いますか。	

1) 実演者・子ども役の活動について

実演者（1人）と子ども役（5～6人）に分かれ、実演者は6分程度（6分は必ず実施）実演する。演じる前に、名前、指導案番号、対象年齢、どの場面を実践するかを言う。

実践内容は、夏休みの課題（必須）を中心に行う。実演者は、アドバイザーから保育実践アドバイスシート・指導案アドバイスシートを受け取り、授業終了後に指導案を書き直し、考察・反省欄を記入し、翌週までに提出する。アドバイスシート（ホッチキスでとめて）も提出する。

子ども役は、指導案にあらかじめ目を通し、指導案の年齢にふさわしい子どもの姿を表現する。実演が終わると実演者に口頭で感想を伝える。（アドバイス担当者記入時間に）

2) 保育実践アドバイス担当者・指導案アドバイス担当者の活動について

実演者の指導案、保育実践・指導案アドバイスシートを受け取り、保育実践を見て、保育実践・指導案アドバイスシートにアドバイスを項目に沿って記入する（5分程度）。記入後、保育実践・指導案アドバイスシートを実演者に渡す。

3) 模擬授業後の振り返りについて

実演した学生は、保育実践と指導案のアドバイスシートを回収し、アドバイスと教員のコメントをふまえた上で指導案を書き直し、提出する。

5. 学生のアンケート結果からみる学生の変化

本項では、「保育実習指導」の授業においておこなった「模擬保育」についての、学生のアンケート結果及び授業の様子をもとに、その効果について分析し、実習、及び就職後に保育現場で役立つ授業内容の検討を試みる。

【2023年度保育実習指導 模擬保育に関するアンケートの項目】

1. 授業でおこなった模擬保育に関して、自分が選んだ内容にチェックを入れてください。

（複数回答可）

- ☐ 制作
- ☐ 歌
- ☐ リズム遊び
- ☐ 手遊び
- ☐ 絵本の読み聞かせ
- ☐ 紙芝居

- ☐ ペーパーサート
- ☐ エプロンシアター
- ☐ スケッチブックシアター
- ☐ てぶくろシアター
- ☐ パネルシアター
- ☐ マジックシアター
- ☐ その他

2. 1でその他と回答した方は、具体的な内容を記入してください。

(例) フルーツバスケット

3. 何歳児を対象に想定して指導案を書きましたか？（複数回答可）

- ☐ 0歳児
- ☐ 1歳児
- ☐ 2歳児
- ☐ 3歳児
- ☐ 4歳児
- ☐ 5歳児
- ☐ 異年齢保育
- ☐ その他

4. 模擬保育をする際、もっとも難しかったのはどのような点ですか？
（複数回答可）

- ☐ 時間配分
- ☐ 子どもの年齢に応じて保育の内容を考えること
- ☐ 考えていることを言語化すること
- ☐ 指導案の書き方
- ☐ 準備物や、環境構成を考えること
- ☐ 保育者の援助や配慮を考えること
- ☐ 予想される子どもの行動を考えること
- ☐ 同級生の前で先生役を演じること
- ☐ 子どもに伝わる言葉遣い、声かけ
- ☐ 子ども役になって先生役の同級生をサポートすること
- ☐ 同級生の保育に対するアドバイスをアドバイスシートに書くこと

(指導する側の視点を持つこと)

☐ その他

5. 3回の模擬保育を通して、自分が成長したと感じるのはどのような点ですか？

(複数回答可)

※4と同じ項目のチェックリストより選択してもらった

6. 模擬保育は、実習で役に立ちましたか？

☐ とても役に立った

☐ まあまあ役に立った

☐ どちらともいえない

☐ あまり役に立たなかった

☐ まったく役に立たなかった

☐ その他

7. 6について、役に立った、あるいは役に立たなかったと考える理由を書いてください。

どちらともいえない、その他と回答した人は、そのように回答した理由を書いてください。

8. 次の実習に行った際、授業の内容を実践に活かしたいと思っていることを自由に書いてください。

以上が、学生に実施したアンケートの項目である。

次に、アンケートの結果について言及する(77名中回答者数71名。複数回答可の設問については、各項目はのべ数)。

1) 模擬保育の内容について

授業でおこなった模擬授業の内容についての回答は以下のようなものである。

① 製作 42

② 手遊び 32

③ 絵本読み聞かせ 15

④ ペープサート 11

⑤ スケッチブックシアター 9

⑥ てぶくろシアター 6 リズム遊び 6

⑦ 歌 5

- ⑧ マジックシアター 3
- ⑨ 新聞遊び 2 パネルシアター 2
- ⑩ 紙皿シアター 1 折り紙 1 ゲーム 1 その他 1 (どんじゃんけん)

この設問において、複数回答可としたのは、手遊びと絵本読み聞かせ、歌と製作など、複数の項目を組み合わせて指導案を作成する可能性を考慮してのことである。一番多いのが製作となっており、次いで多いのが手遊びであるが、手遊びは単体ではなく、導入部分として、ほかの項目と組み合わせて実施されたケースがほとんどであった。また、絵本の読み聞かせが3位、ペーパサート、スケッチブックシアター、てぶくろシアター、リズム遊び、歌、マジックシアター、新聞遊び、パネルシアター、紙皿シアター、折り紙、ゲーム、どんじゃんけんの順番となった。

3) 何歳児を対象と想定して指導案を書いたか

対象とした年齢については、1歳児(6)、2歳児(17)、3歳児(6)、4歳児(3)、5歳児(1)、異年齢保育(1)という結果であった。

2歳児がとりわけ多いのは、2月の保育実習を意識した結果であると考えられる。しかし、年齢による偏りがかなり出ることから、グループ全体でみたときに、満遍なくすべての年齢についての指導案の書き方を学び、模擬保育を行ったり、観察したりできるよう、こちらで年齢を指定するなど、方法には検討の余地があるだろう。また、学生によっては、年齢に応じた発達段階の理解が十分でなく、座学の範囲での知識もまったくないなかで、連関性のない年齢と保育内容の設定を行っているケースもあったため、指導案を書く前に、もう一度自分が対象とする年齢の言葉の発達や身体的、社会的発達について調べ学習を行ってもらうなど、学びを深めるための工夫の余地が残されていると考える。

4) 模擬保育をする際、もっとも難しかったのはどのような点か

この設問に関しては、圧倒的に多かったのが「時間配分」であり、次いで「子どもの年齢に応じて保育の内容を考えること」であった。続く形で挙がっていたのは、「考えていることを言語化すること」「指導案の書き方」であった。「時間配分」と「子どもの年齢に応じて保育の内容を考えること」に関しては、連動していると考えられ、まだ実際に現場で保育をした経験がそれほど多くなく、どの年齢の子どもが、どのようなことができるのか、またそれにはどれくらいの時間がかかると予想されるのかについて、まったく見当がつかないために、時間配分が難しく、保育内容を考えることも難しい、という学生の状況が想像される。「考えていることを言語化すること」「指導案の書き方」に関しては、保育や子ども理解というよりも、国語力や文章力に大きく左右されると思われ、このアンケートの結果からは、模擬保育の際に学生が感じている難しさに関しては、二次的なものと捉えられている可能性があると考えられる。

また、こちらの予想に反し、「同級生の前で先生役を演じること」「子ども役になって先生役の同級生をサポートすること」など、演技に関わる面でもっとも難しいと感じた学生は少なかった。

5) 3回の模擬保育を通して、自分が成長したと感じるのはどのような点か

ついで、模擬保育を通して学生が成長したと感じる点についての結果である。結果に関しては4)のときのように、圧倒的な回答数の違いはなかったが、一番多かったのが「時間配分」、次いで「指導案の書き方」「子どもの年齢に応じて保育の内容を考えること」であり、「考えていることを言語化すること」「準備物や、環境構成」が続き、「保育者の援助や配慮を考えること」という結果となった。

この結果からは、学生が模擬保育を行う際に難しさを感じていた「時間配分」と「子どもの年齢に応じて保育の内容を考えること」に関しては、実際にやってみて、どれくらいの時間がかかるのか把握できたということ、また教員や同級生のアドバイスなどにより、その年齢の子どもにできることとできないことを理解できたということが推察される。

また、「指導案の書き方」や「考えていることを言語化すること」「準備物や、環境構成」など、事前に準備できることや、自分の努力によって改善できる点に、成長を感じているということが予想される。その意味では、同級生が子ども役を演じることによって、実演する側は、実際に子どもを相手にするときとまったく同じ経験ができるわけではないが、事前に予想がつかず、準備しようのないことと、予想がつかないながらも準備できることの腑分けが可能になったのではないかと推察することができる。

6) 模擬保育は、実習で役に立ったと感じるかどうか

模擬保育が実習で役に立ったと感じるかどうかについては、「とても役に立った」という回答が33、「まあまあ役に立った」という回答が32、「どちらともいえない」が6であり、「役に立たなかった」「まったく役に立たなかった」という回答はなかった。

7) (6) について、役に立った、あるいは立たなかったと考える理由

「役に立った」と答えた学生が書いていた理由は「一度やってみることで、どこができていないのかわかった」「いきなり実習でやるのは不安だったので、一度シミュレーションできてよかった」「ほかの学生の指導案を見ることで、保育のアイデアをたくさん学ぶことができた」などがあった。また6)で「役に立たなかった」と回答した学生はいなかったが、役に立たなかった理由については、「学生と子どもは全く違うので同級生としてしか見ることができない」「アドバイスがもらえるよさがあるが、グループのメンバーに左右される面があり、アドバイスをもらえていないグループもあった」「実際の環境と教室では異なるので、模擬保育室や、ホールを使ってやれるともっとよかった」などという意見が見られた。

先にも述べたように、模擬保育そのものの難しさとして学生がまず感じる要素としては、「時間配分」と「子どもの年齢に応じた保育内容を考えること」があがっており、「学生が子ども役を演じることに無理がある」といった趣旨のことはあがっていなかった。しかし、この回答に関しては、自分が子ども役を演じるときよりも、実演する際に同級生を「子ども」として見るのが難しいとする意見が見られた。このことは、子ども役の学生が、対象となる年齢の子どものことをどこまで理解し、演じることができていたか、という問題でもあるが、実演する学生の側の見立てる力に起因する可能性もあるため、現時点で明確な分析結果を導くことは難しい。

ただ、学生が子ども役を演じることで、「実際の子どもと違う」と感じることで自体に意味があり、具体的に、ほんとうの子どもであれば、どのような状況になり得る可能性があるのか、ほんとうの子どもを相手にするときに、どのような困難が発生し得るのか、というシミュレーションを、学生相手にやってみた上で、さらにひろげていくことは可能であるといえるのではないだろうか。

8) 次の実習に行った際、授業の内容を実践に活かしたいと思っていることについて

この設問については、「模擬保育でみんなにもらったアドバイスを実習で活かしたい」「指導案を何度も書き直したことで、書き方がつかめた」「他の学生が指導案に書いていたアイデアを活かしたい」など、模擬保育で学んだことを活かしたいと回答した学生が多かった。また、子どもたちの声かけについて、模擬保育を通して学んだという回答も散見され、実際の子どもではなくても、一定の学びを得ることはできたことがうかがえる。

6. まとめと今後の課題

以上、保育実習指導における模擬保育の実践について、学生のアンケート結果から、模擬保育において学生が難しさを感じているのは「時間配分」と「子どもの年齢に応じた保育内容を考えること」という、子ども理解にかかわる部分であることが明らかになった。また、二次的な難しさとして学生が挙げていた「指導案の書き方」「考えていることを言語化すること」に関しては、模擬保育を通して成長できたと感じている学生が多く存在することも明らかになった。

難しさを感じている事柄が、模擬保育を行うことですぐに解消されるわけではないかもしれないが、現時点で自分ができていることとできていないことを把握し、アドバイスにそって指導案を書き直すことで、確実に模擬保育を実践する前と変化を感じている学生が多数存在することを把握することができた。

「同級生を子どもとして見るができない」という意見に関しては、実演する側が難しさを抱えている可能性と、子ども役の学生が、対象となる年齢の子どもの発達段階について十分に理解できておらず、ただ漠然と「子ども」を演じてしまったことに原因がある可能性が考えられる。このことに関しては、実演する側の学生も、子ども役を演じる学生も、アドバイスを

学生も、全員が、子どもの発達段階について理解を共有していないと、なかなか建設的な授業内容にすることが難しく、教員のアドバイスを頼ることとなる。

指導案を書く前の段階で、対象の年齢の子どもの言葉の発達や身体的機能についてももう一度調べ学習をするなどして、いわば演劇における役作りの作業（下調べや役柄について細部まで想像し、イメージする）を経ることで、改善が見られる可能性がある。

また、グループ内で意見を言い合う場合、メンバーの積極性によって、かなり学びの深さにばらつきが見られることも、改善に向けて検討の余地がある。また、同級生を気遣うが故に、「楽しかった」しか言わない場面も見られ、よりよくするための親身になったアドバイスができるようになるための工夫や指導についても今後考えていきたい。

一方で、子ども役を演じるときに、目に見えて生き活きする学生が一定程度いるのも事実である。「子ども」になりきるといふ、普段あまり経験することのない状況を楽しんでいるともいえるが、ただ「子ども」を演じるのではなく、年齢や月齢に応じた言葉の理解、身体的機能の発達について、もっと事前に調べ、話しあうことで、演じる際のリアリティーが増すのではないだろうか。

すべての学生が、保育者役と子ども役を演じ、指導案を書く段階から、座学的な理解でかまわないので、主体的に子どもについての理解を深めてから取り組むことで、実演する際にも、子ども役を演じる際にも、変化がみられるのではないだろうか。

保育士の職務は、対子どもだけでなく、他の職員との連携や、保護者とのかかわりなど、柔軟で多様なコミュニケーションが必要とされるものである。

コロナ禍における様々な制約のために、チームでなにかを一緒にしたり、意見を言い合ったりするという機会がこれまで乏しかった学生も少なくない。

模擬保育を、演劇教育の観点から捉え直してみることで、保育実践力の育成だけでなく、社会人として必要な対人スキルを学ぶ機会としても捉えることができるのではないだろうか。

学生のアンケート結果もふまえつつ、今後の授業内容の改善に向けて考察を続けていきたい。

注釈

- 1) 片山紀子編著 荒木美知子著者 西村美佳著者 『新版 保育実習・教育実習の設定保育』株式会社 朱鷺書房 2012 年
- 2) 演劇教育については、平田オリザ『ともに生きるための演劇―「対話」でゆるやかにつながる』(NHK出版、2022 年) に詳しい。
- 3) 文部科学省「教職課程コアカリキュラム」p.13「保育内容の指導法」
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/11/27/1398442_1_3.pdf (2023 年 11 月 27 日現在)
- 4) 猪田裕子・久保木亮子・塩津恵理子「保育者育成における模擬保育の意義に関する一考察(1)」(教職課程・実習支援センター研究年報 1、神戸親和女子大学、17-27、2018)

猪田裕子・久保木亮子・塩津恵理子「保育者育成における模擬保育の意義に関する一考察（２）」
（教職課程・実習支援センター研究年報２、神戸親和女子大学、3-13、2019）

高橋一夫・山口香織・久保木亮子・塩津恵理子「「保育者育成における模擬保育の意義に関する一考察（３）」
（教職課程・実習支援センター研究年報３、神戸親和女子大学、117-128、2020）

- 5) 星槎大学と提携し、資格取得のサポート講座を行っている。

<https://seisa.ac.jp/>

文部科学省「資料７：特別支援教育に係る教育職員免許状について」

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1312981.htm

- 6) 文部科学省「認定こども園について」

https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab200601/002/002/001.htm

- 7) 保育所の保護者、地域との関係等（児童福祉法）「保育士の定義」

<https://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/06/dl/s0604-2l.pdf>

（ひだか ゆき：講師）

（ひぐち みゆき：講師）

（ただ れいこ：准教授）

（いくた のぶひこ：講師）